

〈書評〉油井大三郎・遠藤泰生 編  
『浸透するアメリカ、拒まれるアメリカ  
——世界史の中のアメリカニゼーション』

(東京大学出版会、2003年7月)  
定価(本体価格4,000円+税)

松本悠子

本書は、アメリカ国内だけでなく世界の歴史において、「浸透するアメリカ」すなわち「アメリカニゼーション」の過程と、「拒まれるアメリカ」すなわち「アメリカニゼーション」に対する抵抗が、どのように関連しあってきたのかを考察することを目的とする論文集である。

では、何故「アメリカニゼーション」を論じる必要があるのか。本書は、「アメリカニゼーション」の多義性を指摘し、それぞれのコンテキストで別に論じられてきた「アメリカニゼーション」を比較検討することによって、アメリカあるいはアメリカ化という言葉が何を意味してきたのかを論じる必要があると問題提起している。新しくアメリカにきた移民を国民として統合する試みを意味する「アメリカニゼーション」とグローバリゼーションの代名詞としてよく論じられる「アメリカニゼーション」、さらには、併合した領土の住民の統合を意味する「アメリカニゼーション」はそれぞれ異なる歴史的背景を持っているにもかかわらず、どれも「アメリカニゼーション」という言葉で論じられてきた。本書はこの点に着目し、これらの「アメリカニゼーション」に共通項はあるのか、それぞれの時代と状況に呼応して、アメリカあるいはアメリカ化の意味がどのように異なっていたのかを比較することによってアメリカを新たな視点から論じることができると提案しているのである。

本書は三部構成で、「アメリカニゼーション」を「内的」、「境界的」、「外的」の三類型に分類し、その類型別に13編の論文を配置している。論文集の中には、ほとんど論者間のコミュニケーションなしに作られるものもあるが、本書では、総説に加えて各部の冒頭にそれぞれの論文の位置づけと総合的な理解をするための解説がつけられており、本書が論者及び編者間の緊密な共同作業の産物であることがよくわかる。しかも、各部の解説に、各論文の要点が明解にまとめられているために、評者が内容紹介をする必要はないほどであるが、ここでは評者にとって興味深かった点を中心に概要をまとめてみたい。

まず、第I部では合衆国における「アメリカニゼーション」論の変遷がまとめられた後、5編の論文を通して「内的アメリカニゼーション」が分析されている。「内的アメリカニゼーション」とは国内の移民や人種・民族集団に対する国民統合のはたらきかけとしての「アメリカニゼーション」を意味する。といっても、単なる同化の強制ではない。第I部の解説は、国民統合の過程で自己の拡大、及び自己の再定義が常に求められてきたため、アメリカ合衆国にとって「内的アメリカニゼーション」は自己変容のプロセスでもあると論じている。ただし、5編の論文では、19世紀後半から20世紀のアフリカ系アメリカ人、

中国系移民、日系移民、メキシコ系移民及びメキシコ系アメリカ人をめぐる「アメリカニゼーション」の問題が対象であり、アメリカ国民である「われわれ」の側そのものに関する議論というよりも、むしろ国民統合が「他者」を生み出すプロセスおよび「他者」の側からの対応に重点が置かれている。誰を「他者」としたかを検証することで、「われわれ」アメリカ国民が自己をどのように定義したかを明らかにする試みといえよう。

19世紀後半から20世紀転換期の黒人「エリート」に焦点を当てた第1章大森論文は、南東欧からの移民を大量に迎えたアメリカ社会が「人種」によって国民の秩序化を試みた時期に、黒人「エリート」層は「カラー・ブラインド」な社会の構想によって自らの「アメリカ人性」を強調しようとしたと論じる。従来、黒人の歴史は抑圧された人々の歴史として描かれてきたが、自らの「アメリカ人性」を強調するために移民や下層民を黒人エリートが攻撃した点を指摘するなど、国民の重層性と相互の関わりの構造が構築される過程や、人種を無化しようとした「カラー・ブラインドな社会構想」の行き詰まりなど、国民統合という観点から見ることによって黒人史の見方にも新しい視点を提供している。19世紀後半の中国移民問題を論じた第2章貴堂論文も、19世紀後半の「国民の境界」と「白人の境界」を一致させる動きのなかで、非白人として中国系移民を「他者」化する動きと「白人」としての自己承認を求めるアジア系移民とのあいだに闘争が起こったと指摘している。貴堂論文は、白人／黒人の二項対立ではないアメリカ社会の人種関係を「帰化不能外国人の創出」という観点から描いており、人種概念、アメリカの市民性の概念の再考に新しい視野を提供している。両論文ともに、19世紀後半以降の国民秩序の形成の過程で人為的に作られた人種概念が「他者」を生み出す「境界」となり、そこに近代国民国家における「国民化の暴力性」を見ているのである。

さらに、「われわれ」アメリカ国民と「他者」の間の境界が流動的であり、「他者」とみなされた集団内で、「アメリカニゼーション」に対する対応が異なったことも第1部において指摘されている。第3章廣部論文は、20世紀初頭の日本人移民の矯風運動を題材に、日本人移民指導者の「米化運動」への積極的関与と、一般の日本人移民のさめたまなざしを描いた。第4章中川論文と第5章村田論文は、第二次大戦後のメキシコ人移民及びメキシコ系アメリカ人と「アメリカニゼーション」との関わりに関して、非合法移民も含めた「一枚岩」のアイデンティティを戦略とするチカノ運動と米国市民となったひとびと（及びその予定者）を組織しようとするメキシコ系の労働運動との間の矛盾を指摘している。これらの論考は、それぞれの集団内のひとびとの置かれた社会的状況によって「アメリカニゼーション」の理解が多様であり、相互に矛盾する側面をはらんでいることが、アメリカ国民の「われわれ」と他者の境界の構築の過程を複雑にしてきたことを明らかにしている。と同時に、これらの論考は、集団そのものの外側からの規定とアイデンティティの重層性の問題に関連して、多文化主義が内包する各人種民族集団の「戦略的本質主義」の問題を指摘しているのである。

第II部では、ニューメキシコ、プエルトリコ、ハワイを例に、複数の文化が邂逅し、合衆国に併合された時点で固有の伝統文化を強く保持していた「境界地」において、「アメリカニゼーション」とそれに対抗するアイデンティティがどのように関わったかが、論じられている。第6章水野論文は、アメリカによる併合後、ニューメキシコにおける土地の権益をめぐる、「市民」でも「外国人」でもない「インディアン」という法的地位を先

住民が選択した過程を考察している。ただし、アメリカニゼーションの前にこの地域の先住民はスペイン・メキシコ系のヒスパノの支配下で村落単位の土地の共同保有と一定の自治を経験しており、水野論文はアメリカ化に対抗する先住民という図式では語ることでできない境界地の重層性を明らかにしている。第7章阿部論文では、20世紀前半のプエルトリコにおける「トロピカライゼーション」という概念装置の持つ意味が論じられている。すなわち、アメリカ合衆国が「遅れた民族」としてプエルトリコの支配を正当化し、内なる「他者」を作り出す一方、植民地の指導者層は、統治能力の証明として、あるいはアイデンティティの根元として内なる「野生」「トロピカル」を探し求めた。結果として、「トロピカライゼーション」は、「支配構造の入れ子」を作り出す装置となったのである。マイノリティとしてのアイデンティティの主張が、アメリカ多文化主義を支えるアメリカのナショナリズムに回収される危険をはらんでいるという指摘は鋭い。第8章矢口論文は、ハワイのカウボーイ「パニオロ」をアメリカ史上初のカウボーイとして積極的に認知させようとする映画などの20世紀末の動きを、「ナショナル」の枠組みのなかでローカル性を誇示し、さらには「ナショナル」な枠組みの再構成をもめざす試みとして論じている。第8章は時期的にも扱う素材も全く異なるためにまとめて論じることに少し迷うところであるが、第Ⅱ部の3論文に共通して論じられていることは、「アメリカニゼーション」が一方的な支配と被支配、あるいはアメリカ化する側とされる側に分けられるわけではなく、アメリカ合衆国が「境界地」の人々を内なる「他者」としたとき、その「アメリカニゼーション」を逆手にとった形で「境界地」のひとつとあるいは少なくともその指導者層のアイデンティティが形成されていくプロセスであろう。

第Ⅲ部では、アメリカ以外の国における「アメリカニゼーション」とそれぞれの国における対応を論じている。解説では20世紀における「外的アメリカニゼーション」の内容として、「大衆消費社会化」、「大衆文化の浸透」、「民主化や近代化の助長」が挙げられている。しかし、5編の論文は、アメリカの経済的、政治的介入や指導者層によるアメリカ化の導入など、むしろ直接的ともいえる「アメリカニゼーション」の試みを論じている。第9章佐藤論文は、アメリカとメキシコの国境近くのメキシコ側の都市メヒカリにおけるアメリカ資本による開発が引き起こした「アメリカニゼーション」と20世紀前半の「メキシカニゼーション」との関わりを考察している。メキシコ側のナショナリズムの高揚のなかで土地と労働者の「メキシコ化」が進んだが、アメリカ資本への依存体制が残った点を指摘している。第10章馬論文では、20世紀前半、宣教師などによる中国の一部エリート層のアメリカ化とタイム社の報道から、現実と乖離した中国のイメージができる過程を論じている。第11章中野論文は、フィリピンにおける1950年代のアメリカの冷戦工作史を通して、フィリピン・エリートがアメリカの存在を国内政治の展開に織り込み、アメリカの介入を利用してきた歴史、中野氏の言葉では、アメリカニゼーションを「フィリピンナイズ」する歴史として20世紀フィリピン政治史を描いている。第12章深川論文では、第二次大戦後のドイツにおけるアメリカの民主化政策、とくに再教育政策が論じられ、ドイツの人々は生活様式などを受け入れたが、ナチスの影響力や権威主義的行動規範を払拭する目的は達せられず、冷戦の激化によりアメリカ側も妥協を行ったと指摘されている。第13章上原論文は、戦後復興期のフランスにおいて、一部指導者層によりアメリカモデルによる近代化政策の導入が試みられたが、それはあくまでフランス的解釈にしかすぎず、

しかもフランス人全体で共有されることはなかったと論じている。

第Ⅲ部は、当然の事ながら多様な地域を論じているため、その共通項を見いだすことは難しい。しかし、本書の目的である「アメリカニゼーション」の多様なタイプの比較を考えるならば、フィリピン、メキシコのようにアメリカの「帝国」としての側面が直接的に現れる地域と戦後直後とはいえドイツやフランスとを並べることによって、アメリカが世界に対して持っているまなざしの共通項を探ることができるといえよう。しかも、どの地域においても、指導者層がアメリカ化を選択的に利用している状況は、現在のグローバル化が一方的なアメリカ化であるという議論を見直す契機をも提供しているのである。

このように広い問題関心と新しい視点に立つ論考を集めた論文集であるだけに、今後検討すべきいくつかの問題が本論文集によって提起されているように思われる。「無い物ねだり」であることは承知の上で、いくつか評者が気づいた点をまとめてみたい。第一に、「内的アメリカニゼーション」を「他者」とアメリカ国民である「われわれ」との間の境界の構築の側面からとらえた場合、総論や第Ⅰ部の解説で述べられているアメリカ・ナショナリズムの特性、すなわち建国の理念を基盤とする「シヴィック・ナショナリズム」とはどのように関わるのであろうか。アイルランドや南東欧からの移民をも「われわれ」の中に包含する過程をみるならば、アメリカのナショナリズムが市民的な結合に基づくナショナリズムであるが故に、アメリカ人は自己のアイデンティティを拡大できたといえるかもしれない。たしかに、「他者」の側も建国の理念を逆手にとって自らを「われわれ」の中に加えようと試みてきた。しかし、この「市民」という言葉をたんなる法的市民権ではなく、アメリカ社会の完全なメンバーとなる資格としての「市民性」として考えた場合、市民的結合がアメリカの国民統合の基盤であるならば、何故そもそも人種の境界（ジェンダーや階級の境界も考えるべきであろう）は20世紀後半まで維持されたのであろうか（完全なメンバーシップとして考えた場合、今も境界は存続していると考えられるべきかもしれない）。

第Ⅰ部の論考によると、南北戦争直後には人種の境界にとらわれない政策や政治思想が生まれたにもかかわらず、19世紀後半から20世紀転換期にかけて、人種概念を基盤とした国民の秩序化が急速に進展した。その原因について、大森論文は、南東欧系移民を効果的に同化させるために人種の違いが重要となったと説明し、貴堂論文は、急進的な人種平等の政治的実験に対する反動であったと説く。南東欧系移民の同化のために人種概念が持ち出されたというが、南東欧系移民の側に立てば、むしろ「白人性」の議論は摩擦の原因となっていた。また、境界地の住民に対して用いられた「未開」の言説は、市民になる能力がないために住民を「他者」とみなすという点で、人種概念と市民性の議論をつなぐ根拠となろう。しかし、この言説も白人性＝市民性という考え方を維持するためのレトリックともいえる。何故それほどに「アメリカニゼーション」すなわち国民化が「白人性」に執着する社会を構築したか、あるいは人種概念とシヴィック・ナショナリズムの基盤である「市民性」の理念がどのように関わるのであろうかという点に関する説明の全貌は、依然として見えていないように思われる。本論文集はエスニック・ナショナリズムの対極としてアメリカのシヴィック・ナショナリズムを論じているようにも思われる。しかし、もし「白人性」と「市民性」がほぼ同義であったとしたならば、アングロサクソニズムが白人に拡大されただけであり、エスニックな紐帯をもととする他国のナショナリズムとアメリカのナショナリズムとの間にそれほど距離があるのかどうか、再検討する余地がある

のではないだろうか。

第二点として、統合する側の「自己変容」のさらなる解明が必要ではないであろうか。人種概念がアメリカニゼーションの基盤であるとした場合、「白人性」の境界の変遷は、アメリカ人の自己拡大とはいえるが、はたして自己変容としてどのように論じられるのであろうか。いわゆる「われわれ」の側のアイデンティティの基盤となる価値観や理念を建国の理念として論じた場合、固定されていたかのような印象があるが、それは変容していないのであろうか。「われわれ」の側の「アメリカニゼーション」の基盤となる価値観や理念の構築とその変遷の歴史に関する議論、社会運動としての「アメリカニゼーション」とその担い手に関する議論、アイルランド移民や南東欧移民に関する「白人性」の議論と「アメリカニゼーション」との関わりなどに関する論考があったならば、総論や解説で論じられている問題提起がより説得力を持ったのではないかと思われる。

なお、本論文集の目的であり最大の特色は、「アメリカニゼーション」の過程を、米国内、境界地、外国の三レベルにおいて比較的に研究することである。では、比較することによって「アメリカニゼーション」をどのように理解したらよいのであろうか。第Ⅱ部の解説は、「内的」と「境界的」「アメリカニゼーション」の比較を行っている。「内的アメリカニゼーション」で論じられた「人種」の概念に依拠した重層的な国民秩序の形成と同じ動きが、「境界地」でも見られ、「アメリカニゼーション」の特性である「内なる外国人の受容と拒絶を支える修辞」の本質が「境界的アメリカニゼーション」の「未開」の言説に見られると指摘しているのである。だとするならば、第Ⅰ部と第Ⅱ部の違いをどこに求めればよいのであろうか。逆に考えれば、アメリカ国内の非白人移民やアフリカ系アメリカ人の問題を「ボーダーランド」でとらえることができるとも考えられる。第Ⅰ部の各論考で論じられているように、内なる「他者」と位置づけられた彼等もまた、文化的出自から「根こそぎに」にはされておらず、「固有の文化」を持ち（あるいはそのように主張し）、「アメリカニゼーション」の中に完全な同化ではない道を探る対抗の歴史を持っているからである。ただし、合衆国に併合された地域の人々及び先住民の歴史と非白人移民やアフリカ系アメリカ人の歴史との決定的な違いは、帰属意識の中に固有の土地を持っているかどうかであろう。ただし、チカーナ・フェミニズムが「ボーダーランド」の力を強調しているように、メキシコ移民もまた、歴史認識としてはアメリカの南西部の土地は本来自分たちの土地であるという認識を持っているのである。第Ⅰ部と第Ⅱ部の質的な違いをどこに求めるべきか、さらなる議論が必要であろう。

第Ⅰ部と第Ⅱ部の比較は行われているが、第Ⅰ、Ⅱ部と第Ⅲ部はどのような比較が可能なのであろうか。国内のアメリカニゼーションに関する伝統的な解釈、すなわちアメリカ的理念や価値観を教育することによって同化を促進し、市民を育てることといった解釈を行うならば、外国に対する民主主義やアメリカ的理念、価値観の押しつけというアメリカ化と容易に並べて論じることができるようと思われる。しかしながら、第Ⅰ部、第Ⅱ部で論じられてきたように、国内及び境界地のアメリカニゼーションが人種概念や「未開」の言説を基準とした国民及び併合地域の住民の重層的な秩序化と「他者」の創成を意味しているとしたら、むしろ「外的アメリカニゼーション」とは同じ言葉を用いながら全く異質であると考えられるのであろうか。あるいは、ある時期までの中央及びラテンアメリカあるいはアジアの諸地域に関しては、国内あるいは境界地域におけるアメリカニゼーション

と同様の議論をすることが可能であろうか。総論では、国内あるいは境界地におけるアメリカニゼーションでは、「シビック」な紐帯を重視してきたナショナリズムにより「他者」も建国の理念を逆手にとってアメリカの自己変容を迫った。すなわち、国内では理念に照らして差別や偏見が非難されるメカニズムが担保されている。しかし、外国に対しては、自らの思想や文化を「普遍」として押しつけ、そのような自らの姿勢を相対的に見ることができない、というように対照させている。たしかに冷戦以後のいわゆる「ユニラテラリズム」はその傾向を強めているが、第Ⅲ部の論文が実証しているように、受け手の側から歴史的に見れば、それぞれの国の指導者層も一方的にアメリカ化を受け入れるのではなく、独自に解釈し、選択的に利用しているのであり、アメリカの外に対するアメリカニゼーションも押しつけと抵抗の図式ではとらえきれないのである。さらに、比較の観点でいえば、本書では取り上げられなかったが、「外的アメリカニゼーション」の要素である「大衆消費社会化」や「大衆文化」の役割を「内的」あるいは「境界的」アメリカニゼーションに関しても論じることによって、「アメリカニゼーション」の持つ意味の広がりや多義性がより明らかになったのではないかと思われる。

このように、本書に刺激を受けて、評者としても、様々な課題に気づくことができた。本書は世界史の中に歴史的な過程としての「アメリカニゼーション」を位置づけることによって、「アメリカニゼーション」の多義性と受け手の側の多様な選択と対抗の歴史を浮き彫りにし、刺激的な論考によって、今後のテーマの発展性を示唆しているのである。まさに、昨今のアメリカ研究に必要とされている国際的位置づけと相対的視点を提供する先駆的な研究といえよう。さらに、各章の論考が、他の地域の歴史や他の学問領域でも議論されている国民国家論やアイデンティティ論の最新の動向、さらには多文化主義に対する批判的再考などの動きに敏感に答える形で論を展開しているため、アメリカ以外を対象としている研究者にとっても多様な問題を提起している。その点からも、本書はアメリカ研究の今後の方向性を示唆していると考えられる。